題字：牛窪梧十氏

# 「自律した社会」を目指して ミャンマーで活動を続ける医師

## 名知（なち） 仁子（さとこ）さん

**プロフィール**
狭山市出身の医師。1988年、大学卒業後日本医科大学第一内科医局に入局。2002年に日本人として5人目となる「国境なき医師団」の一員に。2008年、「ミャンマークリニック菜園開設基金」を設立。2011年、団体名を「ミャンマーファミリー・クリニックと菜園の会（MFCG）」に改名。2023年、埼玉県荻野吟子（おぎのぎんこ）賞を受賞。

ミャンマーの主要都市ヤンゴンからバスで約5時間、ミャウンミャという地方都市の無医村で暮らす一人の日本人医師がいます。幼少期から学生時代を狭山市で過ごした、名知仁子さんです。活動している村には電気が通っておらず、村の人々は濁った池の水を飲んで生活しています。そんな環境で活動を続ける名知さんにお話を伺いました。

「医師になるきっかけは高校生の時に父のお見舞いに行ったことでした。目の病気にかかった同室の患者さんが主治医の先生に感謝している姿を見て、みんなに喜ばれる眼科医になりたいなと思ったんです」

その言葉通り医学部に入学し、26歳で都内の大学病院で医師としての歩みをスタートします。

「28歳の時に自分の人生について考え始めました。医師である前に一人の人間としてどう生きるべきか、という迷いでした」

そんな中、31歳の時に自分の人生を180度変える1冊の本に出合います。その本に書かれた「あなたの愛を誰かに与えれば、自分を豊かにする」というマザー・テレサの言葉に感銘を受け、国際医療の道を目指すことに。

「当時、国際医療を目指す医師はほとんどおらず、同僚にも今までのキャリアを捨てるのかと言われました。読み書きしかできなかった英語はラジオ講座で学び、医療活動に十分な英会話を身に付けるのに8年もかかりました」

そして39歳で日本人として5人目となる「国境なき医師団」の一員として、念願の国際医療への道を歩み始めます。

「覚悟はしていましたが、想像以上に過酷でした。初めての活動はタイとミャンマーの国境沿いの難民キャンプ。日本であれば血液検査やCTスキャンなどを使って診断を下せますが、ここで使える医療機器は聴診器1本。日本では助かる命も、ここでは助からない。その現実に直面し、毎回深い悲しみを覚えました」

それでも命を守りたい。名知さんは、その一心で歩みを続けました。しかし45歳の時、自身に進行乳がんが見つかります。

「その時に今までで一番、これからどういう人生を生きていこうかと考えました。そして、生きられるのならば、聴診器1本で人を診ることの大切さを教えてくれたミャンマーに恩返しをしようと決心しました」

ミャンマーの乳児死亡率の第2位は栄養不良。どんなに頑張っても医療だけでは命を救えないことも学んだといいます。こうして国境なき医師団脱退後に立ち上げたのが、現在代表理事を務める団体（MFCG）です。

「手洗いなどの保健衛生と、栄養についての学びの機会を提供するため、この団体を立ち上げました。彼らが自身で食べ物を作って、自律して生きていけるようになることが目標です。現地には小学校を卒業できず、読み書きのできない人たちも多くいます。その彼らから、自分で考え、実践し、変わっていく『人間の無限の可能性』を私は教えてもらいました。学ばせてもらっているのは私の方かもしれません。MFCGの活動を通して、みんなの人生をさらに輝けるものにしたい！その思いを胸に、これからも活動を続けていきます」

巡回診療の様子